唐笠のことは、倭漢の書に所見おほし、薩天錫詩集上卷に、雨傘の詩あり、開如輪合如束、剪紙調膏護秋竹、日如荷葉影亭々、雨裏芭蕉聲簌々、晴天却陰雨却晴、二天之說誠分明、但操大柄常在手、覆盡東西南北行、此詩よく傘のさまをいひたり、又二天の名目あるを知べし、今は日傘雨傘の製殊なれど、此詩に據れば、晴雨に一物を用たるにや、日笠の名はやく聞えて、日笠の浦など名所にもあり、

〔驢驢斷餘〕日傘

日傘ハ八尺也、弓ヲ持ツトキノ用也、

〔萬金產業袋一器財〕傘細工

ひがさ、褦襶（ヒガサ）柄七尺、大キさ貳尺壹寸、骨數五拾本、柄大ぼね、小ぼねや天井の間、みな朱ぬり也、但天井の間は紙なれば、右荏の油に丹をいれてぬる、柄ほね等は、漆ぬり也、總じての紙は、本式はねづみとて、うす墨にて染れども、當代は只ゑら紙そのまゝにて用ゆ、油をひく、右は長老がた、法會規式の時の日傘也、雨の爲にはあらず、褦襶の二字は、いづれの詩人の語にか、褦襶待晴開とあれば、むかしも雨のためになき證據分明也、涼傘とかくは和字にて、これ全く炎暑の時の日よけの傘なるべし、右の褦襶とはすこし心たがへり、〇中略

ひでり傘、これ涼傘の字なるべし、此ころのはやり事にて、あゐの染紙一ッ色にはり、日かげ傘とする、仕やう、もみぢ傘の類也、物ずきのすき人仕はじめ、今の腐儒くすしの族の取あつかふ、同じくは自身に日よけがさを指ずとも、乘るべき乘物にのりたきもの也、白紙張にして、青ばななんど引たるは、なを草にしてうるさし、

涼傘、子どもの日よけがさ、草なる物なれば、定りたる事なし、ほね三十本、四拾本、大きさも好む所にゑたがふべし、